

## 記憶と記念の社会心理学 I——身近な死についての語り——

矢 守 克 也\*

Social psychology of commemoration and recollection(I):

how people describe a deep loss after the death of a person closest to them?

Katsuya YAMORI

### 要 旨

災害や戦争が人々に打撃を与えるのは、それらが、しばしば、人の死、とりわけ、身近で重要な人の死を伴うからである。身近な死は、日常世界にとって、その内部に存在するすべての事からの同一性（意味）が、その否定を基点として組み立てられているような、もっとも違背的な領域を構成している。そのため、それは、日常世界における、意味の動揺・混乱、場合によっては、意味の喪失を招来する。そのことを示す具体的な現象として、時間感覚の変調、および、モノと身体の混融という二つの現象を指摘することができる。いずれも、日常世界にあっては、もっとも安定的な弁別を受けているはずの領域までが、身近な死によって失調していることを示す現象である。したがって、身近な死を語るという行為には、独特の困難が存在する。なぜなら、語るということの実質が、言葉（意味）によって対象を同定する操作であるとすれば、意味の動揺・喪失を喚起する身近な死という体験を語ることは、そもそも語ることのできない（少なくとも、語ることの困難な）事柄について語ろうとする営為だと言えるからである。よって、一方では、語りに託された「記録」を保存・伝達するとともに、他方で、この体験（語り）の「空白」を浮上させる営為（「記憶」）も重要である。今後、意味の変調という原初的な場面に相在したモノを「記念物」として活用しつつ、「記憶」を保存・伝達する方が模索されるべきであろう。

### I. 身近に死を体験すること

#### (1) 意味の動揺と喪失

災害や戦争が人々に打撃を与えるのは、それらが、しばしば、人の死、とりわけ、身近で重要な人の死を伴うからである。

自らにとって重要な人物の死は、通常、日常世界に対して、もっとも違背的な領域を構成している。つまり、それは、それに直面して初めて、日常生活が、それをありえないことだと（無根拠に）断定した上で営まれていたことに気づかせるような——より正確には、それを想像もしない彼方へと放逐することによって、日常世界を、まさに日常たらしめているような——、そのような極端に違背的な出来事である。言いかえれば、身近な人の死は、通常は、「ありえないこと」、あるいは、「あってはならないこと」としてさえ、日常世界の中には存在していない。それは、日常世界には、端的に存在していないのである。それは、ただ、事後的、

かつ、消極的な形式でのみ——それ以前には、そのようなことが起こるとは想定もしていなかったという形式でのみ——その存在が与えられるような、もっとも違背的な出来事である。

同じことを日常世界の側からとらえれば、日常世界は、そのような極端に違背的な事態を、想定外の出来事として、その「外部」へと排除した上で、その内部が組み立てられていると言える。この人も、あの人も（そして、もちろん自分自身も）、明日も生きている。このことの否定を、言わば筆頭として、ほかにも、例えば、この蛇口からは明日も水が出る、高速道路は明日も立っている等々…これら決して網羅的に挙示しつくすことのできない、無数の違背的な事態を、その「外部」へと排除することによって、日常世界は成立している。つまり、日常世界の内部に存在するすべての事からの同一性（意味）は、これらの排除（否定）を基点として組み立てられている。このような排除は、それが原初的なものであればあるほど——その顕現が日常世界にとって違背的であればあるほど——、それが、体験の、もっとも根底的な地平として機能しているという意味で、内部を構成する要素の意味的同定にとって、より根幹的な役割を果たしている（大澤, 1990）。

したがって、人の死という、もっとも違背的な事態（の一つ）が出来た場合には、それは、日常世界を構成するあらゆる要素（モノも、人も、出来事も含め）の意味的同定——それが何であるのか、あるいは、それが自分の生にとってどのような意味をもつのか——を、微妙に、ときには、大きく揺るがさずにはおかない。すなわち、身近な死は、控えめに言って、意味の動揺・混乱を、場合によっては、意味の喪失を招来するわけである。なぜなら、それは、日常世界の内部にある他のどのような事象よりも——当事者に対して、最も重要なものとして現れている事象よりも——、もしそれが出来た場合には、日常世界の（再）構築（要するに、生きていくこと）にとって、際だって重要な役割を担っているからである。言いかえれば、日常世界の内部のすべての事からの同一性（意味）が、それ（の否定）を基点として組み立てられているからである。

## （2）アイルトン・セナ

突発的な災害・事故、あるいは、病気などによって、身近で重要な人を喪った人々が体験する次のような感覚が、上述の主張を証拠だてているように思う。

「アナウンサーの人が何とも言えない顔して立ってて、『アイルトン・セナが亡くなりました』っていうようなことを言うじゃない。で、何というのかな、その言葉の意味がよくわからなくて。『亡くなる』ってよく使う言葉だけど、どういうことを指すのか？みたいな。放心状態ってあのことを言うんだろうね、きっと。…（中略）…もう泣いて泣いて布団かぶって泣いて。でも、その日はどうしても学校行かなきゃならない日だったから、もう、しぶしぶ起きて部屋のドアを開けたら、めちゃくちゃよいお天気なのね。何だか凄く許せなくて、どうしてあんなにも偉大な人が亡くなったのにこんなに青空なの？せめて、雨でも降ってくれていれば…（中略）…下に降りていくと、お父さんとかお母さんとか普通でいるんだよね。いつもと変わらない朝。セナがいないのに、いつもの日常がそこにあって、お兄ちゃんだってセナのファンにくせに、平気で御飯なんか食べてて…」（やまだ, 1999; p.2-3.）。

これは、事故で急死したF1レーサー、アイルトン・セナの熱烈なファンだった女子大学生の語りの一部であり、やまだ（1999）が紹介している例である。さしあたって注目すべきは、Bowly（1980）の言う「無感覚の段階」の存在である。かけがえのない人の死が、実感を伴わないという感覚で感受されることは、以前からしばしば指摘されている。一例をあげれば、阪神・淡路大震災で友人を喪った人々の体験を調査した、やまだら（1999）にも、「真っ白…」、「でもやっぱり現実としては受けとめられなかったな、最初はね」、「はじめジョークかと思った。その後しばらくずっと信じられなかった」といった語りが紹介されている。ちなみに、やまだらは、この段階を、「実感なしの段階」と呼んでいる。

言うまでもなく、これらの語りの中で、当事者に対して、無感覚、ないし、実感なしという感覚で現れている事態こそ、意味の動揺・喪失に他ならない。このことの意味は、われわれの前に現れるものはすべて——モノも、他人も、出来事もすべて——、単なる知覚的現前を超えた存在として、つまり、「…（という意味のもの）として」という形式で現れる、ということ踏まえればわかる。すなわち、意味の動揺・喪失の渦中にある当事者が、その事態を、あえて言語的に表現しようとするれば、それは、無感覚、放心状態、真っ白といった形容にならざるを得ない。意味の不明な知覚的現前に直面すれば、そこに生じる対象世界は、まさしく「真っ白」になるしかなく、同じことを主体側に定位して表現すれば、それは、「無感覚」と感受されるだろう。

身近な死と、日常世界における意味の動揺・喪失との繋がりを示す例は多い。例えば、身近な人を喪った人々の多くが、「時間の感覚がおかしくなった」、「どのくらい時間がたったのかわからない」など、時間感覚の麻痺・鈍麻を表明する。時間が、日常世界における諸事象の同一性の確定にとって重要な役割を担っていることは、明らかである（時間感覚について詳しくは、II節を参照）<sup>1)</sup>。あるいは、意味の動揺・喪失を、より直截に表明する語りとして、「何もかもが、色褪せて見えた」、「何もかもが、違って見えた」といった例を指摘しておくこともできるだろう。

セナの死に直面した大学生の意味の動揺・喪失を示唆するもうひとつの材料が、自分と、自分を除く世界との乖離感覚である。具体的には、いつもと変わらない朝の存在を疎ましく感じる、というくだりである。ここで、この大学生は、両親が普段通りそこにおいて、普段通り家族の食事が進んでいることに、さしあたって、怒りと形容できるような感情を抱いたと報告している。例えば、「セナがいなくなったのに、私がこんなに深く悲しんでいるのに、他の人はどうってことなく、普通に御飯食べて仕事に行って…もう許せなくて許せなくて」（やまだ, 1999; p.3）といった報告である。しかし、筆者の考えでは、この怒りにも似た感情は、それ自体すでに事後的な意味づけを受けた結果ではないかと思う（現に、この体験報告は、大学生が1年前のことを振り返る形式で採取されている）。

当時の感覚を、より正確に再現するならば、むしろ次のようではないだろうか。つまり、両親がそこにいること、家族で食事をする——これら、それ以前の日常世界においては、その意味が問い直されることもないほどに自明であった出来事・行為の意味が、動揺・喪失した。（セナが生きていた）日常世界においては、両親の存在、普段通りの食事などの出来事は、ま

さに「普段通り」にやり過ごすことのできる事象である。しかし、あらゆる事象の同一性（意味）の地平となっていたセナの生（セナの死というきわめて違背的な事象の否定）が否定されては、すべての事象の同一性が混乱をきたす。その結果として、例えば、両親とは自分にとって何なのか、あるいは、何のために家族で食事をとるのかといった、日常世界においては不問に伏されていた事からの意味を自覚的に問い直さざるをえなくなる。まず、この、より重要で端的な事実があって、その後、それが自分にだけ限定されていることに対する怒り、疎外感といった感情が派生すると見るべきだろう。

筆者自身の体験に照らしても、この感覚の正体は、「自分が悲しんでいるのに、他人はなぜ平然としているんだ」という怒りではなかった。それは、むしろ、不思議、奇妙と形容したくなるような感覚であった。筆者の体験は、数年前の夏、父を亡くした当時のものである。そのときのメモによれば、「今、（バルセロナ）オリンピックやっている。世の中とのつながりが切れた感覚」とある。今でも鮮明に記憶しているのは、病院のテレビで、マラソン中継を見たときの心情である。それは、明らかに、怒りや悲しみではなかった。そうではなく、自分がどうあろうと、世界はたんとそこにある。自分とは無関係に、世界が、そこにある。このことに対して覚えた不可思議の感情であった。ここでも、日常世界においては、例えば、「金銀銅独占とは、すごい」、「またやってる。関心ない」、「あんなのに熱上げるのは、成熟した国家じゃない」といった、さまざまな同一性（意味）を帯びて、それまで、日常世界の中で安定した位置を保持していたオリンピックという事象が、宙に浮いてしまっているのである。

## Ⅱ. 時間とモノの動揺

### （1）時間の変調<sup>2）</sup>

死を身近に体験することは、ときに、日常世界に非常に大きな動揺を与える。すなわち、日常の意味世界の部分的な混乱にはとどまらない、抜本的な動揺を日常世界にもたらすことがある。ここでは、そのことを示唆する具体的な現象として、時間の変調、および、モノと身体の混融という二つの側面について述べておきたい。

再び、セナの例に戻ろう。この大学生の語りをフォローしていくと、彼女が時間に関して、独特の——しかし、身近な死に接した場合には、典型的に現れると言ってもよい——時間の様相を体験していることがわかる。例えば、まず、次のような語りである。「もうエイプリルフルは一ヶ月前だよ。アホな冗談は、こんなバカな夢はもう終わりにしてよ。…（中略）…神様、お願いですから、セナを生き返らせてください。セナは死んじゃいけない人なんです。…（中略）…そんなのは絶対だめだから、だから…」（やまだ,1999; p.2）。この種の感覚——仮に、感覚aとしておこう——は、結局のところ、通常は（言いかえれば、多くの人々にとっては）、確定性・既定性をもって現れている、言わゆる「過去」の事象が、当人（だけ）にとっては、そのように現れていないことを示している。すなわち、それに対して、何らかの選択性を帰属しうる事象（自分が何かをなしうる事象）として現れていると理解できる。

一方で、「もうね、本当に後を追って自殺しようとしたんだよ」という、もう一つの典型

的な感覚bも存在する。すなわち、セナが存在しない（今からの）世界に対して、耐えがたい無意味、虚無感を覚えるという感覚である。この感覚bは、感覚aとは正反対に、多くの人々にとっては、未確定性をもって現れている、言わゆる「未来」の事象が、当人（だけ）にとっては、そのように現れていないことと同値だと言えるだろう。言いかえれば、それに対して、何らの選択性を帰属しえない事象（自分には如何ともしがたい、虚しい事象）として現れていると理解できる。

以上を要約すれば、感覚aは、多くの人々（社会）が、通常、「過去」として構成する事象を、当人（だけ）は、「未来」として構成していることを意味し（当人は、今から、何とかできないものかと考えているのだから）、逆に、感覚bは、多くの人々（社会）が、通常、「未来」として構成する事象を、当人（だけ）は、「過去」として構成していることを意味している。やまだ（1999）の用語をあてるならば、感覚aが、ちょうど假定法過去のモード（「もし、あのとき…していたら、～にならなかったのに」）に相当すると言えるだろう。

さらに、この大学生（のみならず、おそらく多くの人）が、このような事態を乗り越えようとするときに援用する典型的方略に付随する時間感覚に注目しておくべきだろう。その方略は、次のような語りによく表現されている。「セナという人の人生は、すでに神によって決められていた。F1ドライバーになり、ここまでやり遂げて、ここに終わる…（中略）…たくさんの人に感動を与えて、希望や光をもたらして、そして人生を、この世での人生を終えたんだ。死んだわけじゃない。使命を立派にやり遂げて、神様の元に戻ったんだ」（やまだ,1999; p.6）。この感覚——感覚c——は、感覚aによって、いったん「未来」化された過去を、文字通りの「過去」、つまり、もう当人の選択性の及ばない事象として再構成するための手続きだと言えるだろう。なぜなら、神とは、文字通り超越的な形象であり、すべての現実的・具体的事象に先験する存在だからである。「自分があのとき…していれば」、「もうすこし早く…していれば」という、過去の「未来」化に起因する苦しみを解放すべく、超越的な「過去」を導入するわけである。全部、神様が決めたこと（「過去」）なのだ。

要するに、見方をかえれば、当の本人がそう申告するように、この大学生にとって、セナの死は、神の死、すなわち、超越性の死だったのである。I節で指摘したこと——違背的な事態に対する原初的な排除が、日常世界にとって、もっとも根底的な体験の地平として機能し、その内部を構成する要素の意味的同定の基点となっていること——は、日常世界の構成が、何らかの超越性（神）の存在に負っていることと、別のことではない。セナという神が消滅した後、この大学生は、それに代えて、セナという過去の神をその内部において認定する、新たな神の導入を図ったわけである。

こうして取り戻された真正の「過去」（超越性）は、真正な「未来」、つまり、自らの選択性を発揮しうる、虚しくない「未来」の回復にも資することになる。大学生は、先の引用に引き続いて、次のように言う。「私が死ねなかったのは、未だ私の人生をやり終えていないってことなんだ。私にもセナほどではないが、ささやかな使命があるのかも知れない」（やまだ,1999; p.6）。この感覚dは、感覚b（同時に、感覚a）を乗り越えた姿であり、いったん過去化した「未来」を本来の姿へと回復した様相だと考えられる。なお、やまだ（1999）の言う假定法現

在は、この様相に相当すると言えるだろう。

## (2) モノの身体化

身近な死が、日常の意味世界にもたらす根底的な動揺を示す、もう一つの例が、モノと身体  
の混融である。

ここでも、セナに関する語りから見ていこう。注目するのは、前節で紹介した語りに登場した  
天気に関する一節である。すなわち、「もう、しぶしぶ起きて部屋のドアを開けたら、めちゃ  
くちやよいお天気なのね。何だか凄く許せなくて、どうしてあんなにも偉大な人が亡くなった  
のにこんなに青空なの？ せめて、雨でも降ってきてくれれば…。この種の感覚は、身近な死  
という例外的な出来事に遭遇した場合に限定されるわけではなく、自らの気分、感情状態と外  
の世界（例えば、天候）との間に、奇妙な不一致や不整合を感じることは、たびたびある。

問題は、そのことの意味である。筆者の考えでは、ポイントは、「凄く許せない」という表  
現にあると思う。これは、天候（という自然現象）に、意志（こころ）を見る表現である。す  
なわち、天候（空）を、私の認識（働きかけ）を待っているモノとして遇するのではなく、そ  
れ自体、能動的な意志（こころ）を秘めた存在、言いかえれば、身体として、それを見ている  
ことを意味している。別の能動性の発揮のしよう（セナの死を悼むような、しとしと雨とか）  
もあるのに、それを選択していないから「許せない」のである。

類似の事例は、ほかにも指摘できる。これは、大澤（1996）が紹介している事例である。阪  
神・淡路大震災に宝塚で遭遇したある人は、地震の後しばらくの間は、見るものすべてが「凶  
器」に感じられていたという。実は、筆者自身、この地震の後、まったく同じ感覚をもった。  
当時の日記には、「鶴橋駅。近鉄上のJRの高架が命をもっているよう。不気味」とある。こ  
のことについて、大澤（1996）は、「つまり、事物の背後に〈他者〉の不可解な攻撃的な意志  
を読みとってしまうのだ。われわれの生を取り囲む偶有性をまざまざと実感することは、その  
ことの反作用として、その偶有性に見合う——その偶有性をもたらすにたる——不確定な意志  
を担った〈他者〉の存在についての想定を、無意識の内に招き寄せるのではないか」（p.12）  
と語っている。

あるいは、次のような例もある。筆者は、肉親を喪う直前、病院からの帰途、あるファミリー  
レストランで家族とともにとった食事のことを、非常に鮮明な感覚とともに想起することがで  
きる。具体的には、当時の空気感（温度や湿度）、レストランの室内にこもった匂い、食器の  
模様、テーブル、壁の柄などの事物である。このような体験そのものは、程度や状況の差こそ  
あれ、おそらく万人に共通するものであろう。そして、そのことの意味について、しばしば、  
「大変なときには、案外、そういうつまらないことを覚えているものよ」などと説明されたり  
する。

しかし、この説明は、おそらく誤っている。それらの事物は、決して、つまらないものなど  
ではない。だからこそ、記憶にもとどめられているのである。すなわち、これらの事物も、セ  
ナの死の直後に、あの大学生が直面した青空と同様、もはやモノとして存在していたのではな  
く、それ自体が、意志（こころ）を宿した存在、つまり、何のことはないモノとしてやり過ご

すことのできない存在と化していたと見なければならぬ。それは、けっしてつまらぬモノなのではなくて、「手応え」のある身体だったのである。

では、それら空気、食器、壁に宿った意志（こころ）は、どこから来たのか。簡単なことである。筆者（という身体）から来たのである。これまで、身近な死は、日常世界内部の諸要素の意味的同定を根こそぎ失効させかねない力を秘めている、と指摘してきた。この超越性の失効は、その程度が高まった場合には、もっとも原本的な同一性のひとつ（身体とモノとの区別）をも、やすやすと横断してしまう。筆者が、モノに見たところ、すなわち、能動性（例えば、逃れがたく押し寄せてくる不快な空気、無味乾燥な表情を見せる調度類、不愉快に耳に迫る周囲の喧噪）は、もはや否定しがたい現実となりつつあった肉親の死に直面していた筆者自身のこころ（能動性）と別のものではない。大澤（1990）の用語系に準拠すれば、通常、筆者自身の身体へと求心的に帰属される志向性が、対象へと遠心化し、対象たるモノを身体と同一の位格を備えた存在へと変容させたと表現できるだろう<sup>3)</sup>。

### Ⅲ. 身近な死を語ること

なぜ、また、どのような形式で、人々は、身近な死について語るのか。

これまで述べてきたことを前提にするならば、そこには、独特の困難が存在することに気づく必要がある。身近な死は、一言で言えば、意味の動揺・喪失を喚起するのであった。そして、語るということの実質が、言葉によって対象の意味を同定する操作であるとすれば、身近な死の体験を語ることは、そもそも語ることのできない（少なくとも、語ることの困難な）事柄について語ろうとする営為だと言える。

戦場での体験を分析した富山（1995）が、これと同じことを重視している。戦場の具体的な体験が、身近な死を中核としていることは言うまでもない。「戦場の記憶を体験の特権化に帰着させることなく考察しようとするとき、注目すべきは、それが個別的、具体的事象へ執着している記憶であるにもかかわらず、個人的体験としては存立していないという点である。…（中略）…安田がこう述べるとき、彼の「十糧」へのこだわりが、体験による強烈なりアリティなどではなく、むしろ体験として語りえない『空白』（空白）を前提にしていることが看取されなければならない。安田は、自分にしか了解できない体験を主張しているのではないのだ。…（中略）…問題は、この『空白』が何かということである。結論を先取りすれば、それは、悲惨であるがゆえに語れないのでもなければ、たんに語り得ない何かということでもない。…（中略）…戦場の具体的体験を語ることは、『空白』をいかに埋めるかという作業ではないのだ。語れば語るほど、その言説により構成された意味が崩壊しだす点こそが、『空白』の領域なのである」(p.100-103)。

ここで強調されているのは、次の2つのことである。第1に、語ることのできる体験（の部分）に相対する形で、語ることのできない体験（の部分）が存在するのではない。語ることができない「空白」は、語るという実践と相関してしか現れない。そして、この語りにも導かれるように、その存在が開示される世界こそ、これまで指摘してきた、意味（言葉）の動揺・喪失

によって特徴づけられる原初的な体験の世界にはかならない。第2に、戦場での体験、一般に、身近な死の体験は、それに関する常識的見解が説くような体験、つまり、本人でないとわからない個人的な体験ではない。それゆえ、次のように言われる。「動かしがたい個人的な体験を語っているのではなく、語れば語るほど個人的な領域が解体してしまう不安定な発話こそ、戦争体験の語りなのである」(富山,1995; p.104)。それは、「本人しか、わからない」のではなく、あえて言えば、「本人にさえ、わからない」のである。そして、仮に「本人にわかる」ことがあるとすれば、それは、「他者」に対して語るということを通してなのである。

#### IV. 展望——体験の伝達へ向けて——

体験、とりわけ、身近な死を語ることの困難が、これまで述べたようなものであるとするならば、その伝達へ向けて——何らかの実践的見地から見て、その必要性があると認定される場合——、どのような方途が考えられるだろうか。

戦争や災害などの体験についての語りは、その多くが、意味の動揺・喪失という原初的な体験を直截に表現したものではなく、その事後において回復された意味システムに定位した上での回顧に過ぎないことも多い。さらに、それが、Anderson (1991) の言う「饒舌なナショナルな語り」によって被覆されてしまうこともあろう。それにもかかわらず、こうした語りの実践は、最大限に尊重されねばならない。なぜなら、体験の「空白(ブランク)」を浮上させる準拠点として、もっとも有力な契機が、ほかならぬ語りだからである。われわれとしては、この語りの実践から生成される体験の基層を浮き彫りにする方途を模索していくことが重要だろう。

このような観点に立って、筆者は、体験の二層(「言葉の領域」と「身体の領域」)を区分し、その上で、体験に含まれる前者の領域を保存・伝達する営為を「記録」、後者の領域の保存・伝達の営為を「記憶」と呼ぶことを提唱している。また、後者を保存・伝達するための方法として、伝達者(体験者)の身体性に強調点をおくアプローチ(さしあたって、「ショアーのアプローチ」と呼んでいる)と、被伝達者の身体性に強調点をおくアプローチ(こちらは、「絵解きのアプローチ」と仮称している)の2つの可能性を考えている。さらに、「身体の領域」の保存・伝達の困難(あるいは、不可能?)を克服するための鍵として、II節で指摘した「記念」となるモノを想定している。この2つの方途についても、両者を支える原理的なメカニズムに関する理論的検討、両者の実践に関するフィールド研究を開始している(矢守,1999)。もっとも、これらに関する検討は、現時点では、萌芽的な段階にとどまっている。詳しくは、別稿を期したい。

## 注

- <sup>1)</sup> 正確に言えば、「同じ」ものの過去や未来における無数の様態（例えば、私矢守の、過去や未来における見えは、まるで異なっている）が、一つ一つ無関係な事態として現れるのではなく、矢守という「同じ」一つの意味——ここで登場する「同じ」という認定の根拠になっているものこそが、「同一性（意味）」である——に等値されているとき、そのことと相関して、過去や未来といった時間が生まれる。ここで言う同一性を欠いた世界に、時間は存在しない。このことの意味は、単近なところでは、自分に、(発達の)いつ時間という感覚が誕生したかを想起してみればわかる。時間の感覚と、周囲の事物・人物の同一性の覚識とは、ほぼ同時期に発生したはずである。
- <sup>2)</sup> 本項の議論は、理論的には、大澤（1999）の時間論に依拠している。そこでは、分析哲学者による緻密な論証を紹介しながら、時間の実在性を否定し、時間とは、認識者がもつ、ある種の自由（選択性）——ただし、これは、既定性を選択するという奇妙な自由ではあるが——の結果として生成されることが主張されている。
- <sup>3)</sup> 筆者は、このような過程を経た事物が、それにまつわる「記憶」の伝達にあたって、真の意味での「記念物（記念品）」として機能しようと考えている。この件については、すでに基礎的な考察、フィールドワークを開始している（矢守,1999）。

## 引用文献

- Anderson, B. 1991 *Imagined communities*(rev. ed.). Verso: London. (白石さや・白石隆 1997 増補：想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行 NTT出版)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss* (Vol.3), *Loss: Sadness and depression*. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳) 1981 母子関係の理論：対象喪失 岩崎学術出版社)
- 大澤真幸 1990 身体の比較社会学 I 勁草書房
- 大澤真幸 1996 虚構の時代の果て——オウムと世界最終戦争 ちくま新書
- 大澤真幸 1999 〈自由〉の条件 1：開封する前に舌打ちするひと 群像, 54(1), 258-269.
- 富山一郎 1995 戦場の記憶 日本経済評論社
- やまだようこ 1999 喪失と生成のライフストーリー 発達, 79, 2-10.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正普・藤田志穂・堀川学 1999 人は身近な「死者」から何を学ぶか——阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより—— 教育方法の探究, 2, 61-78.
- 矢守克也 1999 記念と記憶の社会心理学——Talks on a Fault: 断層上の語り—— 日本グループ・ダイナミックス学会第47回大会発表論文集, 32-33.

## Summary

Natural disasters and wars could give a great shock to people because they often bring the loss of persons closest to them. The death of familiar persons is normally excluded from their everyday thinking as what is beyond imagination. As long as it is excluded from a normal life-world, everything in the world has its own stable identity, i.e., meaning. Thus, if it were to occur, everything looks differently and changes its meaning. We have to attach different identity to each of them to reconstruct our life-world. This reconstruction process is sometimes a heavy burden. Since the deep loss after a death damages meaning system in a life-world, it is normally difficult, sometimes almost impossible, to talk how and what we experienced, in other words, to describe every

element in the experiences with a clear and accurate statement. To put it differently, such experiences inevitably contain a "blank" which cannot be approached in terms of narrative statements. It follows that what people experienced when they looked death in the eye has to be recorded and to be conveyed to others, when that is worth doing from some practical points of view, not only through describing it by words (records), but through regenerating the then life-world consisting of the person's bodily and emotional involvement with it, and some critical material beings, i.e., commemorative materials, which he or she faced at that time (memories).